

釧路湿原自然再生協議会 再生普及小委員会
第14回湿原学習のための学校支援ワーキンググループ議事要旨

■日時：2022年1月7日（金）14:00～15:30

■場所：オンラインでの開催

■出席者：（敬称略・順不同）

<専門家>

- ・高橋 忠一（再生普及小委員会委員長）
- ・境 智洋（北海道教育大学釧路校 教授）

<学校教員>

- ・釧路町立別保小学校 佐藤 祐紀
- ・標茶町立標茶小学校 畠山 泰將
- ・鶴居村立幌呂中学校 長谷 泰昌

<学校教育行政機関等>

- ・北海道教育庁釧路教育局 社会教育指導班 主査 河村 武司
- ・釧路市教育委員会 学校教育部 教育支援課 指導主事 関本 裕介
- ・釧路町教育委員会 教育部 指導主事室 室長 國井 彩子
- ・標茶町教育委員会 指導室 指導室長 秋山 豊
- ・釧路湿原国立公園連絡協議会 事務局次長 元岡 直子、事務局員 松橋 由希
- ・環境省北海道地方環境事務所 釧路自然環境事務所 環境専門員 中村 隆之助

<ワーキンググループ事務局>

- ・環境省北海道地方環境事務所 釧路自然環境事務所 自然保護官 瀧口 さやか
- ・公益財団法人北海道環境財団 山本 泰志、安田 智子

■議事次第：

1. 開会
2. ワーキンググループの取組報告
3. その他
4. 閉会

■議事概要

1. 開会

《配布資料確認後、自己紹介》

2. ワーキンググループの取組報告

事務局より資料1について、写真を共有しながら説明後、映像資料「達古武湖にヒシ狩りに行ってきました」を映写。各取り組みに関係する委員から補足の発言を得ながら、意見交換を行った。

1. 湿原を題材とした学習素材の収集、活用の促進

《映像資料に関する委員からの補足》

- ・緊急事態宣言の発令でフィールドに行くことが出来なくなってしまい、それに代わる映像とヒシの実をいただいた。実際に行ってみてみたい、これはどのようになっているのかという声があったほか、フィールド学習後、以前はどうだったか比較する際にも使うことができた。
- ・1人一台の端末を利用して、自由に何度も見返して活用することができ、非常に良かった。
- ・達古武湖の湧き水が欲しいとなったのは、子どもたちからの要望。中間発表会で来ていただき話をする中で、湖の水も比較してはどうかということで、湖の水もいただいた。水質を調べるにあたってはまだ学習していない内容も含むため、少し教えながらという形にはなっている。

《主な意見》

- ・実体験をしたうえで、何を見るべきかの着眼点を持って中学校に上がってくると、どのようなものが調べるきっかけになるのか分かっており、その上に活動と学びを積み重ね、より深いものにすることができる。課題を発見する能力は違うだろうと感じている。
- ・新しい学習指導要領になり、探求的な学習が重要視されるようになってきている。探求学習は、自然の中で見つけたことから始めることが一番探求的に進んでいく。身近な自然の中でいろいろなものを発見し、それが一つのきっかけとなって探求につながっていくということは、良い流れとしてやっていくべきではないかと思う。

2. 自然再生の学校教育への活用促進

《標茶小学校の取り組みに関する委員からの補足》

- ・2回目のフィールド学習では、遊歩道と湖畔の2グループに分かれた。さらにそこで謎が深まったり、質問する、写真を撮るといった目的を持って行った子が多くいた。逆にわからなくなってしまうようになった子もいたが、学びを深めるには良い経験をさせていただいた。

3. 学校教員の関心喚起、湿原の教育的な価値の普及

《教員研修講座に関する委員からの補足》

- ・子どもがどうやったら自然体験の中で課題を持てるかという視点を持ってガイドしていただき、どのように興味関心を引っ張るのかというところが大変参考になった。たっぷり体験した後で疑問を深めていくことが大切だと感じた。

- ・本当に近い場所にこんな場所があると再確認できた。

《主な意見》

- ・自分の中学校でのフィールド学習では、普段の授業、机上で抽象的なものから思考するのが得意な子もいれば、体験からの学び、五感で感受したことを思考につなげることが強い子もいることを実感した。一律の学力評価になりがちなところを体験がひっくり返せる部分もあると感じた。
- ・学校の先生の参加が少なく、先生方の関心がそこまで高まらないということに課題がある。
- ・今回、学生を連れて行き、学生が湿原の魅力を感じるようになってきている。行く事によって見方が変わっていき、どう活用しようかと考えるようになっていく。自分の立場としては、教員になる学生にいろんなことを教えていかななくてはならない。特に北海道に残る子達に対して、こういう場所があるということ伝えていく事が大切だと感じる。
- ・教育委員会とどう連携していくか、研修のやり方や場所の活用方法について、上手く現場とネットワークできると良い。
- ・20代前後の年代の時に経験することが、後になってから何かの動機付けになっていくかもしれない。そのための機会をどのように作るかということが私たちの課題であり、教育委員会との連携や、開催時期を工夫することで参加しやすい状況を作れないかを考えていく必要がある。
- ・小学校、中学校時の地域での体験活動の充実があつてこそ初めて子どもたちの活動が勉強につながっていく。先生の方も基本的な知識がないと、ただやらせるだけになってしまう。釧路にこういった自然があるんだということの良さと、そこから学べることがあるということを先生に知ってもらうことが必要。
- ・冬休みの中に設定されており、参加しやすい日程にはなっている。学校現場では他の研修などもあり参加出来ないという現状もあるだろう。
- ・様々な課題があり、率先して自主的に参加してくださる先生方は限られている。
- ・総合的な学習の時間が湿原を活用するポイントになるが、湿原を通して社会とどのようにつながっていくのかという部分を先生方に認識していただかなくてはならない。湿原だけの研修、学習材ということではなく、どうつなげて他教科に広げていけるか先生方にアプローチしていけたら良い。研修の組み方というのを今後考えていかななくてはならない。
- ・ICTの研修を組んだ時に、先生方は必要感に迫られて、多くの申し込みがあつた。興味関心があり必要感に迫られた時に、参加のしやすさ等とは関係なく自分のために参加するというのは一つのヒントになる。湿原の学びと自然を通した体験的な学びを教員として身に付けることが、釧路管内の教員としてどれだけ大切なのかという価値づけを地道にしていかななくてはいけない。そのためには、例えば釧路管内全体で戦略的に研修を受けて、湿原の価値やタンチョウの事などを学んで現場に還元できるようにするなど、大きい規模での戦略が必要になるだろう。
- ・地域の中で生きている、地域の子どもたちに教育をしているという意識が増えれば、これは私にとって大切なことという気持ちが芽生えてくるようにも思う。先生方と地域との連携性が育ち、そうした先生が増えてくると、この地域で一番大事なものは何かということに関心の中心が動いてくるように感じる。

《釧路湿原流域環境を題材とした学びのプロセスの支援、実践等の発表の場作りに関する委員か

らの補足》

【鶴居村立幌呂中学校 1, 2 年生】

- ・理科の時間に行い、移動 1 時間、体験 2 時間、レポート 2 時間で全 5 時間を確保した。
- ・地域の自然への感度を持ってもらうだけでなく、湿原に関係している人物に魅力を感じてもらったことも大変重要だと感じた。人とのつながりを広げることが保護活動にもつながり、個々の生徒の幸福のためにも、他者とのつながりから喜びを感じることも大変重要で、地域と社会、地域と文化、地域と音楽、湿原を材にした美術など、これらとつなげることでカリキュラムマネジメントができる。道徳と関連つけることもでき、今回、案内いただいた新庄さんを登場人物の中心に据えた道徳を作らせてもらった。他の教科から時間をもらうことが出来れば、中学校であっても体験を 2 時間行う事が可能だと感じる。

【釧路町立別保小学校 5 年生】

- ・子どもたちには煮詰まっていた部分もあり、さらにどうしたら良いかということを見出すことができた。休み明けに調べ学習と発表ボードにまとめていく活動を進めていく。児童自身がやりたいことを上手く発見していけたらと思っている。
- ・子どもたちの興味関心が広いということに驚いた。今年度は iPad で編集などを行っていることで、こちらが助言したことをすぐに直せたり、興味を持ったことをすぐにタブレットで書き加えたりすることが出来るという点が良かった。
- ・テーマと結論が異なっている子が見受けられた。テーマを決めて、それに関して調べたり、自分の中で結論を出すという練習をして発表に至ってもらえれば、発表を受ける側も興味を持って聞けるかと思う。

《主な意見》

- ・学外での発表会について、誰が見てくれるかで、発表のまとめ方も変わってくるという視点もある。当初からどこで誰相手に発表するのかということ意識して、最後のゴールを見通した活動になっていたら、より良かったと思う。
- ・課題を生徒が探し出し、問いを立て、問いを解きほぐすために自分でやっていく過程が発表になる。その発表に対して批判やアドバイス、評価を受けるということも含めた形で行われることが、子どもたちが伸びていく一つの過程となる。
- ・探求的な課題を見つけ、課題を解決していく一番最初の部分が北海道では弱い。積み上げをして経験を積んでいかななくてはならないが、探求的なところを高めてあげる場面がすごく少ない。今回、釧路が湿原を題材にしてやってみようと思ったことは一歩になるのではないかと思う。
- ・大学としては、学力に結び付いていくことを示さなければならない。課題を見つけ課題解決していく中で、いろいろな力をつけることが出来るということを証明していかななくてはならない。
- ・地域のことを題材として取り上げ、様々な課題を解決していくんだという力をお互いの学校が見合わせて高めていく事が出来るシステムになっていけば、もっと変わっていく。幌呂中が中学校として実施されたが、大変意味がある。中学校では様々な学びが高度になっていく。探求をやった時に昔やったことがこれなんだと気付いた時に、さらに新しい課題につながっていく。
- ・時間的な確保がとても大切になってくる。中学校でも探求的な課題を扱う学校が出てくれば、

小学校でやったことがさらに出来ていく。一方で、中学校では高校入試があり、カリキュラムマネジメントという形で教科の横断を考えたとしても、この時期までにこの単元をやらなくてはならないという拘束がある。我々としても中学校で探求的な力をつけるためにはどうしたら良いか発信していかななくてはいけない。その子たちが高校に行った時に、釧路湖陵のような SSH で活躍するような子になっていけば、もっともっと釧路の力がついていく。

- これが重要だと皆さんが理解できるようになると、少し進んでいくような気がする。沢山のやるべきことが学校の教育の中にはあるが、その中でどう時間を使うかということに知恵を絞らなければならないという課題も見えてきた。

《議事内容全般に関する主な意見》

- 体験学習などの機会の場はとても大事なものになるという話があり、こうした活動を増やしていくことは難しい場面も多いと思うが、体験学習や授業の支援を今後も継続していくことがとても大事なことだと感じた。

3. その他

次回 WG の開催時期、次年度の WG への参加、異動時の後任への引継ぎ等を依頼した。

4. 閉会